

愛媛若葉ひろみ句会

いち早く吊るす老舗の夏暖簾

大川 眺春

襟足に風のよりそふ薄暑かな

毛利 敦

遺されし夏帽白のまぶしかり

小西 あや

洗ひたる靴を新樹の風に干す

梶原 一美

新緑の柳を風のもと遊ぶ

松岡 寛孝

一枚を脱いだり着たり木の芽冷

伊藤 京

飛びだしし子を追ひかける夏帽子

井谷 けい

麦の秋バリカンのよう刈られけり

福本 恵子

父母偲ぶ八十八夜の茶摘唄

浜田 千鶴

六月の風をふたつに疾走す

長田 徳子

朗詠す夏足袋久し晴舞台

高田 弘子

水張って早苗のそよぐ安堵かな

藤田 光子

はち巻きし軍歌うたいで行進す学徒動員戦後七十年

高田 治子

柿若葉日にかがやけり痛み癒えて拙くわれの生きゆかむとす

武田 幸子

余分なこと訊かない友の優しさを電話の後の心に秘めおく

蛭谷 寿子

日々行きぬ改善センターの桜見に開花の時期を予測して見る

二宮 安恵

幸を呼ぶナンバンギセル見つけたり茅の根本に可憐に咲けり

西添 春子

医者に行く日初めて夫と花見する散りゆく桜も風情ゆかしき

伊手リツエ

一月余入院すれば飼猫は胸にすがりて啼きて離れず

山本まつゑ

杖をつき夫は畑に虫を取るきれいなキャベツ子等に送らん

兵田トミ子

露茹でて薄皮むけば黄緑の軟らかき茎の調理愉しむ

芝 幸子

商店街の真昼の静けきウインドウわが全身の姿写れり

佐々木登美子

広見短歌会

鬼北の足跡を辿る…【等妙寺編 第2回】

みなさんは、寺の「境内」というと、どのようにイメージしますか。石垣や塀で囲まれ、門があり、その中に入ると本堂と庫裏、四角いお堂が建っている。一般的にはそういった範囲をイメージしがちですが、実際には、そこに至るための参道やお寺の経営のために必要な田や畑、庭園や山林、その他の寺の尊厳や歴史・自然の風景を保持する土地もまた「境内」とされます。寺の占有する土地、それが「境内」です。

さて、さきにイメージされた寺の姿というのは、現代までの歴史の中で作り上げられてきた姿です。幕藩体制確立後に執られた宗教政策で、諸藩の強力な介入により僧組織の統制が図られ、このときに宗旨替えや土地なども含めた寺の配置変更などが大規模に行われました。現在の地表面で認識できるお寺の姿は、17世紀以降に変貌してしまっています。

では、それ以前の等妙寺はどのような姿だったのでしょうか。現在、国の史跡として指定され、保護されている範囲（面積60・96ha）は、鎌倉時代末からの本堂跡やその他の堂

塔、僧坊跡などの主要な建物が立ち並んできた寺院の中心部分で、当時の「境内」のごく一部です。実際の範囲を示した文献や古地図は遺されていませんが、地名の調査等から、寺の所在する芝・中野川はもとより、永野市・奈良・近永の大半は寺領で、境内地内と言えます。また、山は聖域で「奈良山」と呼ばれる範囲は等妙寺のもっとも重要な場所でした。

このように広大な敷地を有していたのは、多数の坊院を抱えていたため、その寺院経営のために必要だったのでしょう。さらに宇和郡内に多くの末寺を抱えた等妙寺は、まさに地域の拠点寺院として、その寺格の高さとともに大規模寺院としての威容を誇っていたと考えられます。



鬼ヶ城連山、通称「奈良山」と山麓（東上空から）